

新潮日本文学アルバム

芥川龍之介



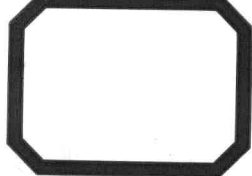
斎藤茂
萩原朔太郎
川端康成
堀辰雄
山本周五郎
太宰治
三島由紀夫
森鷗外



新潮日本文学アルバム

芥川龍之介

新潮社



資料提供協力者

社伝 関口安義
丸谷才一

飯沢 匡
一の宮館
岩森 亀一
小穴 美
榊原 和夫
佐佐木 泰子
下島 連
杉本 わか
清 光 寺
槌田 満文
戸田 民子
堀 多恵子

松岡 筆
森本 修
吉田 精一

芥川瑠璃子

国立国会図書館

東京大学

新聞研究所

朝日新聞社

毎日新聞社

編集協力

日本近代文学館
株式会社木挽社



新潮日本文学アルバム 13
芥川龍之介

一九八三年一〇月一五日印刷
一九八三年一〇月二〇日発行

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二一

電話(業務部) 03-2661-5111

(編集部) 03-2661-5411

振替東京四一八〇八

印刷 大日本印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

定価 九八〇円

乱丁・落丁本は、御面倒ですが、小社通信係宛
御送付下さい。送料小社負担にてお取り替え
いたします。

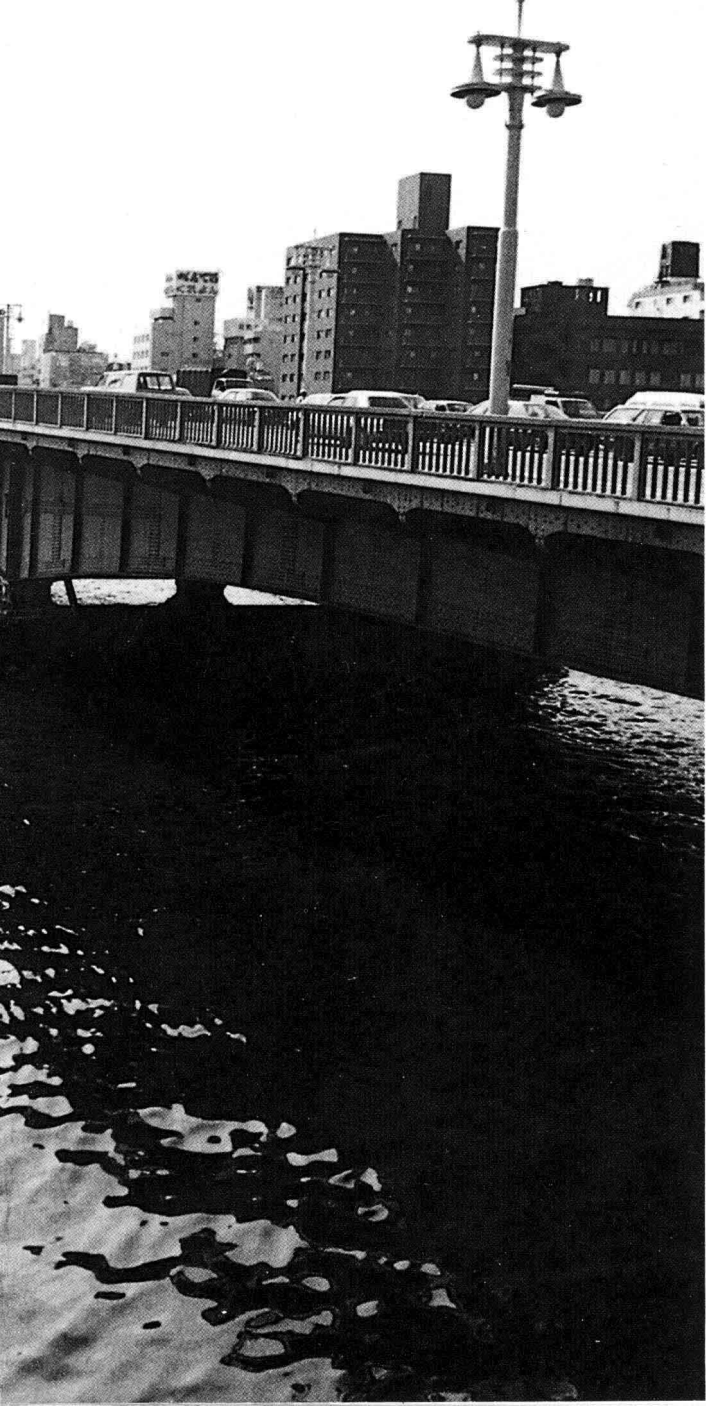
大川の水（明治25年・出生～明治37年）	2
ボプラのそよぎ（明治38年～明治42年）	12
向陵の夢（明治43年～大正元年）	16
夜明け（大正2年～大正4年）	20
恍惚たる悲壮（大正4年～大正6年）	26
我鬼窟（大正7年～大正8年）	32
疲労と倦怠（大正8年～大正9年）	38
湖南の扇（大正10年）	44
神々の微笑（大正10年～大正12年）	65
越びと（大正13年）	75
へ減びへへの道（大正14年～昭和元年）	79
剥製の白鳥（昭和2年・死）	89

へカラー・ページ 水彩画 初版本 生原稿 筆墨 他	49
評伝	2～96
へエッセイ 一枚の写真——完璧なマイナー！ポエット	97
略年譜	104
主要参考文献	109
主要著作目録	111
見返しイラスト「芥川自筆「修善寺画巻」」	
関口安義	
丸谷才一	
関口安義	

芥川龍之介

大川の水

明治25年・出生
明治37年



前ページ／芥川龍之介の葬儀に使用した写真

(大正13年7月、書齋にて)

大川(隅田川)は今も悠々と流れている。

龍之介にとってこの大川は心の故郷だったにちがいない





龍之介誕生の地、東京京橋区入船町八丁目辺り。明治2年、町名変更により明石町となる

→実母フクに抱かれた龍之介



実父新原敏三





四歳の夏（推定）頃の龍之介
大頭で、帽子を求めるのに苦労したという



右より実父新原敏三、龍之介、叔父新原元三郎



養父芥川道章



京橋区入船町八丁目（明治20年版）

芥川龍之介は明治二十五年三月一日、東京市京橋区入船町八丁目一番地（現、中央区明石町、聖路加病院の西南のあたり）に生まれた。父新原敏三、母フクの長男であった。父は渋沢栄一経営の牛乳販売業耕牧舎の支配人として腕を振るっていた。辰年辰月辰日の辰刻に生まれたので龍之介と命名されたという。

父四十二歳、母三十三歳の太厄たいやくの年の子のため、旧来の迷信に従い、形だけの捨て子にされた。拾い親は父敏三の友で耕牧舎の日暮里支店を預っていた松村浅二郎であった。形式的とはいえ捨て子にされたという事実は、龍之介の生に暗い影を投げかけることとなる。彼にはハツ、ヒサの二姉があつたが、ハツは彼の生まれる前年、七歳で夭折している。

龍之介が生まれて八カ月後、生母フクが突然発狂する。その生涯に絶えずドラマがまつわりついた龍之介には、この世に生を受けると同時に早くもさまざまな試練が待ち受けていたのであつた。



右より叔母新原フユ敏三の後妻
伯母芥川フキ、養母芥川トモ



右より姉ヒサ、龍之介
お手伝い、新原敏三 大野ツネ(芥川家の)



五歳、袴着の祝いの龍之介

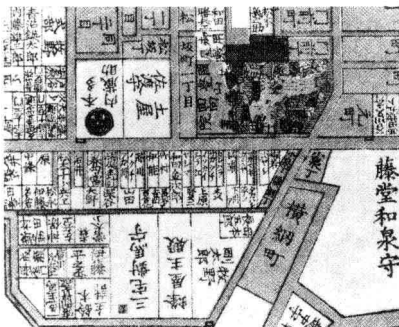
母の発狂のため、龍之介は本所区小泉町十

五番地(現、墨田区両国三―二―一)に住む芥川道章に引き取られる。道章は龍之介の生母フクの実兄で、妻トモとの間に子がおらず、その上同家には生涯を独身で暮らした道章の妹フキ(フクの直姉)もいて、人手には事欠かなかった。龍之介は主としてこの伯母フキの手で育てられ、幼少年期を過ごすこととなる。

つたが、失敗している。

芥川家は代々御奥坊主をつとめた由緒ある家柄で、道章の妻トモは、幕末の大通細木香以の姪である。下町的な江戸趣味の濃い芥川家では、家族全員が文学や美術を好んだ。主人の道章は南画、篆刻、俳句に打ち込み、盆栽に親しむなど多趣味であり、また、一家をあげて一中節を習い、芝居を観に出かけるなどしている。龍之介のエッセイ「文学好きの家庭から」は、この養家の雰囲気をよく伝えている。

龍之介が育った本所小泉町
嘉永切絵図に「芥川」の姓が見える



本所小泉町（現在の墨田区両国）の元芥川家は石井釣具店である。「芥川龍之介生育の地」の碑も建つ



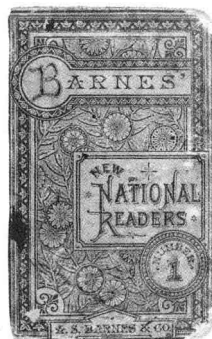
回向院境内には鼠小僧次郎吉の墓（右）や山東京伝の墓（左）などがある

生後八カ月で芥川家に引き取られた龍之介は、以後明治四十三年秋、十八歳で新宿に転居するまで本所小泉町で過ごした。現在の両国駅の南側に当てる。芥川家は新宿移転に際し、石井という釣具屋に家屋を譲り渡したが、釣具問屋石井商店は現存しており、店の前の歩道の隅に、芥川龍之介生育の地という標柱が建っている。

明治二、三十年代の本所小泉町付近には、お竹倉やいくつもの大名屋敷が残っており、江戸の面影を伝えていた。大川はゆつたりと流れ、養家の近くには、山東京伝や俠盗鼠小僧次郎吉の墓で知られた回向院があった。

「彼は本郷や日本橋よりも寧ろ寂しい本所を——回向院を、駒止め橋を、横網を、割り下水を、榛の木馬場を、お竹倉の大溝を愛した。」

（「大導寺信輔の半生」）



十一歳ころから英語の勉強を始めた
ナショナル・リーダー



子供のころ遊びまわった回向院の境内

明治三十年四月、龍之介は回向院の隣りにあった江東尋常小学校附属幼稚園に入園した。日清戦争後の国民精神の高揚する中で、幼い彼は「海軍将校になる」「追憶」という希望を懐いていた。翌年四月、江東尋常小学校に入学する。

小学校時代の龍之介は、回向院の境内に掛かるいろいろな見世物を見たり、近所の子供たちと石塔を倒して寺男に追いかけられたり、お竹倉で遊んだりしている。

一方、物心のつきはじめたころから、彼は養家の本箱にあふれていた草双紙類に親しみ、『西遊記』や『水滸伝』を拾い読みしていたが、小学校に入ると近所の貸本屋をはじめ、大橋図書館や帝国図書館にも出入りするようになる。そして馬琴、三馬、一九、近松などの江戸文学や、泉鏡花、徳富蘆花、尾崎紅葉ら近代作家の作品をせっせと読む。

「愛読書の印象」には、子供の頃の愛読書として、『西遊記』と『水滸伝』を第一に挙げている。

養母トモと龍之介



前列右より、龍之介、姉ヒサ
後列右より叔母新原エイ、新原フユ、婆や(新原家にて)





西洋新報

[illegible]

父事の光

ウエールカーム

夢川龍雨作著

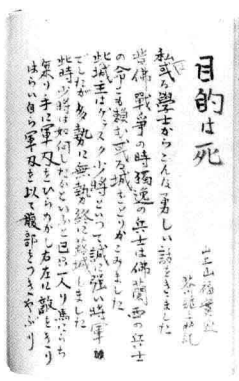
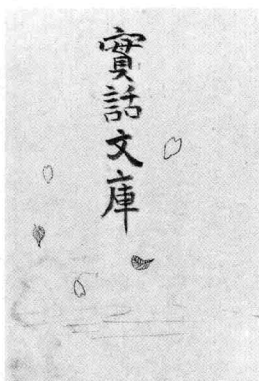
ウエールカーム

櫻樹をさすはなれし花王も今はたりにて
 寝に見ゆのまづさかり鴛戸はいつる人
 多しきわぬた黒ぬりの馬車中の主人は英國
 有名人たる武蔵博士の令息なり
 つが馬車より降り來り馬車を何ぢらひつて
 つかはしたるなりけり其くの茶屋にあしを
 とめぬふりし處もゆんやけんかといふ人

「日の出界」臨時号「文事の光」と小説「ウェールカーム」

本に対する執着は、やがて創作の情熱へと昇華する。尋常小学校四年に進級した明治三十五年四月、龍之介は同級生の清水昌彦、大島敏夫、野口真造らと同覽雑誌「日の出界」をはじめた。

翌々年の高等小学校時代には、「実話文庫」と題した回覧雑誌をほぼ同じメンバーではじめ、「目的は死」などを書いている。同時代の文学少年の多くが通過した回覧雑誌時代を、龍之介も早く小学校時代に体験していたのである。



松武の學士からこんな大膽い話をききました
昔佛戰爭の時、遠處的の兵士は佛蘭西の兵士
の命令を頼りて、ある城をこころがきよめました
此城主は兵士が少く、將士にては、強い將軍、
たゞは、多勢に、一時、終に、城を滅ました
此時の將士は、何したかといふに、已に一人り、馬に
乗り、自らに軍、及、を以て、敵部、と、を、なり

何に諸君此語を聞きたか何なる事か。何れによ
り萬民のため此死したる者は多し。すべからず
海民の難を救ふを見るにこそまずして死せう。敵軍
を力にたりてたゞ少し而して事や戦死せうと
るに力なき。小將を倭國を去るといふは
此は諸君の死也。



何に諸君此語を聞きたか何なる事か。何れによ
り萬民のため此死したる者は多し。すべからず
海民の難を救ふを見るにこそまずして死せう。敵軍
を力にたりてたゞ少し而して事や戦死せうと
るに力なき。小將を倭國を去るといふは
此は諸君の死也。

「実話文庫」と作品「目的は死」

晴雨計氣勝 膨脹氣象則 候所警報輻 湊

高等小学校三年の習字
「芥川龍之助」と署名している

右より龍之介、異母弟新原得二、得二の守り



うれしきざれば直吉
田君は協會をい出し
て柳橋、級生を
買に行きました
八月十四日
畫前は復習讀書
畫過は水泳
最も今日は遠泳會
を催す筈のが延期し
てやばりいもの通り

自分少々が
否非常に怒り且非
常に口癖しがりました
復習讀書便
八月十三日
水泳の事で持ちきり
ますが今日自分とは
田君とは四級生の試
験をうけよう
及第しました

明治 37 年 8 月 13 日の日記

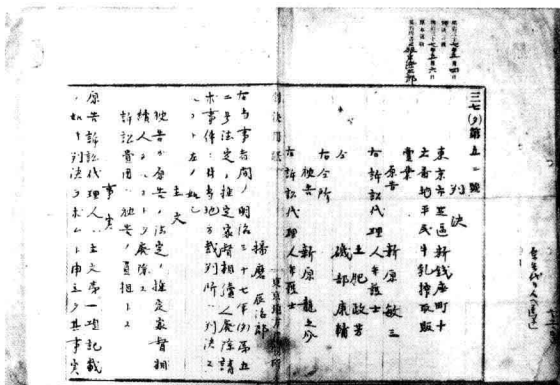
小学校時代、身体の弱かった龍之介は、級友の清水昌彦、吉田春夫らと大川端に水泳を習いに行っていた。明治三十七年八月十三日の日記に、「水練の事で持ちきりですが今日自分と吉田君とは四級生の試験をうけてまづくく及第しました」の一節を見出すことができる。

水泳に夢中になっていたこの年八月、龍之介は芥川家と正式に養子縁組を行っている。実父新原敏三は、この年渋沢栄一から耕牧舎新宿二丁目店の経営をまかせられ、その事業は隆盛を極めていた。彼は龍之介を愛し、手

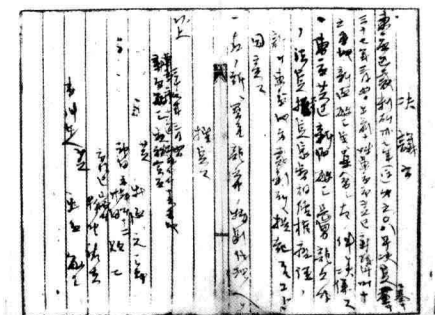
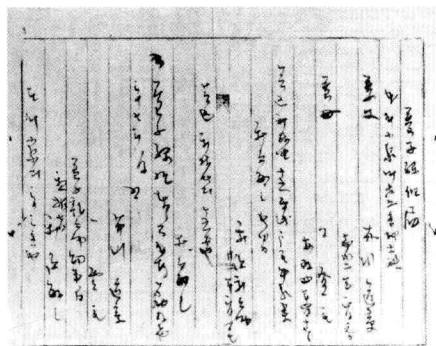
許に戻して育てることを願っていた。しかし、先妻フクの発病後新原家に手伝いに来ていたフクの妹フユとの間に得二という子をもうけていたこともあって、フユの新原家入籍、龍之介の芥川家養子縁組という解決法に従ったのである。そのいきさつを伝える裁判記録や親族会議決議書などが残っている。

明治三十八年三月、龍之介は江東小学校高等科三年を終了する。当時は高等科二年から中学校に入れたが、龍之介は一年延ばしている。体の弱かったためと戸籍上の問題解決に時がかかったためである。

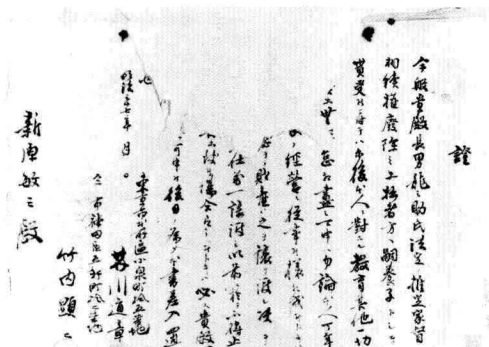
→龍之介の芥川家への養子縁組
判決書類(明治 37 年 5 月 10 日付)



養子縁組届の控



養子縁組に関する親族会議決議書



←養父芥川道章より実父新原敏三へ渡した
養子縁組証書

ポプラのそよぎ

明治38年～明治42年



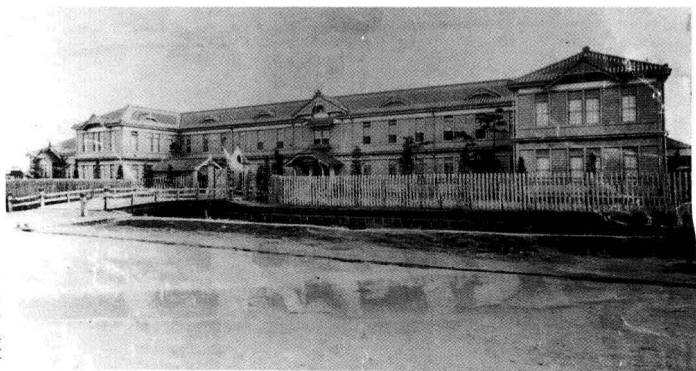
→府立三中(現・両国高校)クラス担任の広瀬雄



府立三中在学当時

明治三十八年四月、龍之介は東京府立第三中学校(現、両国高校)に進学する。江東小学校からは、回覧雑誌仲間の清水昌彦や、のち「父」のモデルとなる能勢五十雄^{のい}らが共に入学した。同学年には他に国富信一、西川英次郎、平塚逸郎、山本喜督司らがあり、二年上に久保田万太郎、河合栄次郎が、三年上に後藤末雄^{のい}らがいた。

龍之介が入学したころの第三中学校は、鼠色のペンキを塗った木造の二階建て、校舎の回りにはポプラの木が植わり、風にそよいでいた。校長は八田三喜(のち旧制新潟高校長となる)、入学時の主任は広瀬雄^{のい}であった。入学後一カ月を経た五月十三日、大森、川崎方面への遠足があり、龍之介はこれを「修学旅行の記」として残している。学業成績は漢文と英語が抜群であった。



龍之介在学当時の府立三中学校舎
(明治39年1月1日撮影)

